

飯田ゼミのアカデミックな伝統と仲間たち

経済学部 近藤節夫

一、創立百周年記念行事と「六〇年安保闘争」

卒業してから半世紀近くを経た近年になって、自分はこれまで有形無形に慶應義塾からどれほど多大な恩恵に与ってきたかと考え、四年間学籍を置いたことをつくづく有難いと思っている。知らず知らず四年間に享けたアカデミックな影響、二年間お世話になった飯田鼎先生及び飯田ゼミ、そして卒業後に仄聞した慶應で学んだという国内外での噂、ただその一点だけで授かったメリットは計り知れない。

二年間の暗い浪人生活を経て初めて日吉キャンパスに足を踏み入れた一九五九年四月、暗いイメージを引きずっていた私の人生に曙光を投げかけてくれたのは、広々と緑に包まれた明るい学び舎だった。その前年に創立百周年記念行事の一環として、体育会山岳部がヒマラヤ登山を目指していた。日本山岳会のマナスル(八一六三〇)初登攀に強い影響を受けたヒマラヤ登山ブームの中で、一九六〇年山岳部はダウラギリ(八一六七〇)から急遽アタック直前になって目標をヒマルチュリへ変更する迷走の末に、輝けるかな！マナスル三山のひとつ、ヒマルチュリ(七八六四〇)を世界に先駆けて制服したのである。

一方で、この年一九六〇年は戦後最大の国民運動にまで発展した、あの「六〇年安保闘争」の激動の一年ともなった。

日吉キャンパス内に充満するお祝い気分と混乱の中で、私はその二つのエポックメーカーキングな出来事に強い衝撃と刺激を受け、次第に関わりを深めていった。

そのひとつは、ヒマラヤ登山ブームに刺激され登山クラブに入って、本格的に登山に挑戦してみたいという望みであり、それは同好会「慶應アルペンクラブ」部員となることで現実のものとなった。慶應義塾が創立一五〇周年を迎えた本年、わがアルペンクラブも創部五〇周年の記念すべき一年を迎えることができた。幸い国内で三千m超の高山をほぼ制覇し旅行者として仕事の上でも登山活動は大いに役立ってくれた。近刊著「停年オヤジの海外武者修行」(早稲田出版刊)に、マッターホルン北壁初の日本人登攀者である芳野満彦氏から推薦文をいただいたのも登山につながる「縁」によるものである。

もうひとつはキャンパス中を動揺させた「六〇年安保闘争」であった。「安保反対」「アンポ！ハンタイ！」のシュプレヒコールに大いに刺激され、度々デモに参加する活動の中で、その後日本の政治、外交、防衛、労働、沖縄基地、等の国家的問題

に政治家の果たす存在と役割が極小化され、漠然と国の行く末に焦燥感と不安を抱いたことである。そのことが私に翌六一年三田へ進むに当り、もつと世界へ目を向けるために、ゼミで大いに学んでみようとの気持ちに駆り立ててくれた。

二、飯田鼎先生のお人柄と温かいゼミ

門を叩いた飯田鼎先生は、当時まだ三〇歳代後半で経済学部教授になって間もないイギリス労働運動史研究の少壮気鋭の学者だった。毎号のように「三田学会雑誌」に高邁な論文を寄稿され、そのアカデミックでやや難解な論旨に圧倒され、その眼光鋭い風貌にも聊か恐れをなしていた。しかし、ゼミ選考に当り私の読書暦をお聞きになった後、即座に「ゼミに入って河上肇を研究してみなさい」と優しい笑顔で仰った。こうして私は飯田先生の一言で飯田ゼミ四回生として不肖の弟子となることになった。この時を起点に、今日までほぼ半世紀に亘り飯田先生から受けたご恩は計り知れない。在学中は飯田先生の薦めに従い河上肇の書を読み漁り、卒論も拙いながらも「河上肇論」をまとめることができた。

社会へ出てからも飯田先生から受け継いだ行動力と正義感は、留まるところがなかった。ベトナム反戦運動に関わった挙句に、ついに戦乱のベトナムへ単身で出かけた。第二次中東戦争直後に混乱の中東へ足を踏み込み軍隊に身柄拘束され危機一髪の臨場感を味わったのも、詰まるところ飯田ゼミのDNAであったのかも知れない（この辺りの経緯については、拙著「新・現代海外武者修行のすすめ」《文芸社刊》に詳述）。

先生は学問について深い思索やヒントを示唆されたばかりでなく、無言の中に大きな背中を見せてくれ私たち若いゼミ生に明確な行動指針を与えてくれた。先生が積み重ねられた学問的業績は言うに及ばず、先生の行動が若いゼミ生に道しるべを示してくれた。慶應義塾労働組合執行委員長として、多忙な中でも身を賭して組織のために、また全組合員のために全身全霊を注いで行動するエネルギーな姿を通して、私たちに言行一致と行動することの大切さを教えてくれた。正にそれは私たちが理想とし、範とすべきものであった。今でも脳裏を去らない先生の語られた、「行動しなさい。そして何ごとも一度批判的な立場に立つて考えてみなさい」とのアドバイスは、その後私自身が試行錯誤を重ねる過程でいつも呼び覚ましていく大切な言葉のひとつである。

飯田先生の高潔なご人格と外見からは窺い知れない優しいお人柄は、慶應義塾を定年でお辞めになるまで多くのゼミ生を惹きつけて離さなかった。在学中から何度もご自宅にお邪魔しては、奥様を交えて楽しく温かいご接待に与ったこともノスタルジアとなって心地よく胸の奥深く残っている。

ゼミ在学中に培った仲間や先輩・後輩との心温まるコミュニケーションは、先生を「

アにして卒業後も営々と続けられ、今も毎年事あるごとに顔を合わせては楽しい会合を重ねている。最近では会員が夫人を伴った交流の場ともなっている。

私たち同期生を中心にする仲間は、すでにその多くが仕事の現場を去った。これから年々同じように労働市場から立ち去っていくだろう。それでいながら私たち飯田ゼミの仲間の強い絆は、再び飯田ゼミという懐かしい集会の場で、「知的道楽」を愉しもうとしている。

本年《年男》となられた飯田先生には、多少健康面で不安が消えない。しかし、この体調さえ許せば奥様ともども会合へ出席していただき、昔に還って甲論乙駁の議論を戦わせている教え子を傍で温かく見守っていただいている。

今もなお「良き師にめぐり会うは人生における珠玉であり、最大の幸せである。」の気持ちが強い。幸せなことに私たちは三田で飯田先生という良き師にめぐり会えたことが、運命に幸いしたと信じている。ひとつの邂逅が人生における至福を生み出してくれた幸運を今しみじみと噛みしめている。飯田ゼミ生となることが、その時点では半世紀に亘る理想的な師弟関係、友人関係を構築してくれるとは思ってもいなかった。飯田先生をコアにして、まだこれからも楽しく知的な交流がいつまでも続けられることを切に願っている。

二〇〇一年四月山形県酒田市に東北公益文科大学が開学された。私立大学ではあるが、自治体からの支援もあり、現在健全な学園経営を行っている。慶應義塾とも浅からぬ関係で結ばれ、隣の鶴岡市にある鶴岡公園・鶴岡タウンキャンパス内には慶應義塾大学先端生命科学研究所と同大鶴岡サイトが併設されている。その初代学長にゼミの二回生(三六年卒)、小松隆二・慶應義塾大学経済学部教授が就任された。大学院生時にチューターとしてサブ・ゼミで小松教授から学んだ私たち四回生が中心となり、激励を兼ねて歓送会を開いた。その後小松学長のご努力が実り、同大は地方大学の中でしっかりした基盤を築いている。二〇〇二年一〇月に、ゼミの仲間一〇人が紅葉のみちのく路を観光がてら同大学見学に訪れた。そして、今年四月七年間勤められた学長を勇退され、教授として留まった小松前学長の労苦を労い、併せて飯田先生の年男をお祝いする催しを都内のホテルで開催し、同じ世代の四〇名を超えるOB会員がお祝いに集まった。小松教授の帰京の都度親しいゼミ生がしばしの交流を求めて銀座「ライオン」に集う。そして、若かったゼミ時代を偲んで口角泡を飛ばすのである。

三、今なお発展途上の飯田ゼミ

五回生の中から昨年何とチェリストが誕生した。アマチュア・オーケストラの一員ではあるが、格調高いクラシック音楽は飯田ゼミらしい文化の香を伝えてくれるものとゼミ会員皆が応援している。半年ごとのコンサートでは会員は夫人同伴でかけつ

け、クラシック音楽に酔いしれた後は、豊かな気持ちになって嬉しい食事をともにするのである。

大手民間企業のトップ、日本有数のシンクタンクのトップ、有名プロ野球チームのオーナー、学園経営者、大学教授等、多士済々の俊秀を輩出した飯田ゼミであるが、数少ない女性会員の中から今も元気に活躍しているウーマンパワーは五指をくぐらない。巨大な労働組合の要職にある会員、またアメリカ滞在が長く英語に磨きをかけ翻訳家として八面六臂の活躍をしている女性もいる。モラルが崩壊し、経済的にも前途多難なわが国の基盤を立て直すために、多少なりともゼミ会員の力がお役に立つことを祈念してやまない。

一月私は初めて韓国・束草(ソク・チヨ)市で開かれた「国際老人福利交流文化祭」の一環である「定年退職者の実情とこれからの生活」と題するシンポジウムにパネリストとして招かれた。その折り頼りになったのは高齢者に関する専門的な資料を提供してくれた二二回生の大学教授であり、評価を高めたパワーポイント画面の英語表示に事細かに、適切なアドバイスをしてくれた八回生の翻訳家の女性であり、また日本の大手企業の貴重な資料を提供してくれた同期四回生の友人である。よくよく考えてみると私がアカデミックな活動において一歩踏み出そうとする際には、相も変わらず飯田ゼミの泉のようなインテリジェンスに頼らなければならない。今もつて飯田先生の掌から離れられずにいるが、友情にも篤いゼミ会員は誇りでもあり実にもありがたい。いつまでも頼りになるシンクタンクである。

卒業後半世紀近くを経てなお三田で学んだ知への貪欲な向学心と好奇心、六〇年安保闘争を介した喧々諤々の議論と行動、溢れる友情等々は途絶えることがない。さらに、近年は精神的なゆとりも相俟って会員の間には旅とカルチャーへの希求が一段と強まってきた。何人かが集まっては時折、箱根や湯河原へも出かける。そして仲間たちとの交流の中で見つけたフレッシュなバイタリティを起爆剤に、社会にも貢献できたらと考えている。慶應義塾という良き学び舎と、飯田先生の包容力と求心力をベースにまだまだ進化し続ける飯田ゼミである。